

学生支援・保健管理機構からのトップメッセージ

学生支援・保健管理機構長 宮崎 泰成



本学における男女協働・キャリア支援事業は今年度で7年目となりました。谷口前機構長、有馬助教、事務スタッフの努力により実りある事業が展開されております。平成20年度に文部科学省の「女性研究者支援モデル育成事業」に採択され、当初は難治疾患研究所、生体材料工学研究所および大学院疾患生命科学研究所が支援の対象でしたが、平成22年度には教養部を含む全学が支援の対象になりました。現在その内容は、雇用・勤務形態・評価、在宅研究支援、研究支援員配備、保育支援、キャリア支援、意識改革、広報・調査および次世代育成支援と多岐に亘っています。

本学の女性研究者比率は、平成22年度は18.5%でした

が平成24年度は20.4%、平成26年度は21.3%と右肩上がりです。しかし、総務省の科学技術研究調査によると日本の女性研究者の研究者全体に占める割合は、過去最高の14.4%（2013年3月31日時点）だったものの、欧米など主要国のなかでは最低レベルにあるそうです。今後は、女性支援とともに、性別や年齢、経験等に関係なく、学生や教職員が能力を十分に発揮できる多様(DIVERSITY)な環境を整備することを目標に機構長として本事業の支援、推進をしていきたいと思っております。



学生支援・保健管理機構 学生・女性支援センター長 平井 伸英

学生・女性支援センターは、その名のとおり学生と女性の支援という二つの使命を持っており、女性支援事業はその片翼です。育児と仕事との両立を実現するため、単に女性を支援対象とするのではなく、男性も含めた我々全員が、ライフステージに応じて働き方を選択し、キャリアを構築できるような支援が重要だと感じています。男女協働・キャリア支援部という名称は、この私たちの思いを表したものです。

人がキャリアを選択していくうえで大切なのは、ロールモデルの存在です。以前、カリフォルニアに住んでいた時、小学校に入ったばかりの娘が、「大人になったら大統領になりたい」と言いました。ちょうど私たちの街にオバマ大統領が来た時のことです。米国初の有色人種の大統領は、日本人の女の子にも大統領になる夢を与えてくれ

たのです。大統領ブームが去りハロウィンの頃、今度は「もっと新しいiPhoneを作りたい」と言いました。私たちの街にはスティーブ・ジョブズが住んでいましたが、ハロウィンにはお菓子を大盤振る舞いすることで知られていました。ジョブズがiPhoneを含む多くの革新的な製品を生み出したことは有名ですが、地域の子どもたちに与えた影響はそれ以上のものがあったのです。

私たちは彼らほどのスーパースターではありませんが、子どもたちにとって最も身近なロールモデルです。私たちはつい、仕事のために家庭や自分の時間を後回しにしがちだと思いますが、子どもたちには将来、家庭も仕事も楽しんでほしいと思っているのではないのでしょうか。だとすれば、私たちもまた貪欲に、家庭も仕事も楽しむべきなのだと思います。そして、医療や研究など様々な分野で活躍する皆さんが、日本の子どもたちに夢を与えていく。東京医科歯科大学がそんな自己実現の場であるよう、お手伝いさせて頂けたらと願っています。

研究支援員配備事業を利用されている方々のインタビュー

当支援部では、出産・育児・介護、あるいは健康上の理由により、研究業務のサポートが必要な方々に研究支援員を配置しています。今年度は9名の利用者のうち、4名の方々にお話を伺いました。



難治疾患研究所 先端分子医学研究部門 細胞分子医学分野 テニュアトラック准教授 大石 由美子さん

1 研究支援員配備事業を利用して、どのようなことが変わりましたか？ 配備前と配備後とで、具体的な改善面などをお知らせ下さい。

① 研究・仕事の面

私は2013年3月にテニュアトラック准教授として難治疾患研究所に着任し、研究室を立ち上げ、現在教室員5名で活動しております。同年12月より男女協働・キャリア支援事業の一環として研究支援員を配置していただきました。研究支援員の方には、私に対する個人的な研究支援を行うだけでなく、試薬の作成・管理など広く研究室全般のために活躍していただいております。今では大切な研究室の一員として、なくてはならない存在となっております。

② プライベートの面

2014年12月23日に開催された内閣府、男女共同参画推進連携会議、東京医科歯科大学主催のシンポジウム「地域とつながって研究者の研究力を育てよう」がNHKニュース7で紹介された折、子育て中の研究者が研究支援員の支援を受けながら研究を続ける例として取材を受けました。自宅で取材を受けたのは初めての経験で、5歳の長男もテレビカメラには興味津々、どのようにテレビ番組が作られ放映されるかを体験することができました。

2 研究支援員が配備されたことで、業績の向上(論文投稿、学会発表、受賞、表彰、研究費獲得等)に関与したものはありますか？ あれば具体的にお知らせください。

論文(共著1報)、招待講演(2014年度 8件)、科研費採択、民間研究費獲得(2014年度) 5件など、はいずれも研究支援員のご支援とともに教室の先生方のご協力やご理解、多くの先生方のご支援の賜物と存じます。この場をお借りいたしまして、関係の皆様にご心より御礼申し上げます。

3 当事業について、改善点やご意見など、コメントをいただけますか？

研究支援員配備事業につきましては大変ありがたく、満足しております。地域と連携した研究者支援という点では、育児や介護の援助が必要な方と援助を行いたい方をつなぐ

ファミリーサポート事業も重要だと思います。東京女子医科大学など、先行している大学機関とも連携し、適宜情報を交換しながら事業を拡大してゆけたら素晴らしいと思います。

4 ご自身の今後のキャリアの目標をお聞かせ下さい(プライベートも含めて)。

最近、ロボットの知能や性能がますます向上していますが、生命はロボットがいかにも進化しても到達しえない崇高さを備えたものです。医学/生命科学研究は、生命の不思議や病気になるしくみを謙虚な気持ちで繙く、大変魅力ある職業だと思います。このような仕事を続けていられることを喜びとし、少しでも皆様の健康の増進や福祉に還元できる成果を挙げていくと同時に、若い世代に研究の楽しさを伝え、人材の育成にも力を注いでゆきたいと思っています。

5 次世代の女性研究者へのメッセージをお願いします。

私たちの社会の発展のためには、「多様性=diversity(ダイバーシティ)を認めること」が絶対的に必要だと思います。男性はこうあるべきだ、女性はこうあるべきだという固定観念を捨て、例えば、結婚後も継続して働く女性がいてもよい、介護のために時間を融通しながら働く男性がいてもよい、という柔軟さが大切です。また、年齢や性別を越えて多くの方が育児や介護を実際に体験し、当事者にとって最も必要な行政サービスは何かを考えることも重要です。例えば、子どもを保育園に預けて仕事を続けることは、時間的な制約を伴います。24時間保育が可能となれば時間的制約の解消にはなりますが、それがお子様やご両親にとって、本当に幸せとは言えません。女性だけを特別に援助するような施策を講ずるのではなく、残業は極力行わないなど、女性だけでなく皆が働きやすい社会的環境を整えることが重要だと思います。意識改革には時間がかかるものですが、本事業が定常化するなど社会は少しずつ変わってきています。次世代の研究者を目指される皆様には、男性も女性もごく普通にライフイベントと両立しながらキャリアを積み上げていくことができるよう、私も微力ながらひとつのロールモデルとなり、いろいろな方々と連携しながら体制づくりを推進してゆきたいと願っております。私も、若い方々と一緒に研究できることを心から楽しみにしています。



1 研究支援員配備事業を利用して、どのようなことが変わりましたか？ 配備前と配備後とで、具体的な改善面などをお知らせ下さい。

① 研究・仕事の面

出産予定日と論文のreviseの時期がちょうど重なっており、出産までにrefereeの要求通りに実験がこなせるか、自分はもちろん、共著者の先生方も（私以上に？）、不安に感じていた時期に、支援員の方に手伝っていただけることになりました。おかげさまで、データ取り込みについては支援員の方にお任せし、私自身が研究室にいられる時間はすべて「自分にしかできない実験」に集中することができました。その結果、ぎりぎりでしたが出産する前にrefereeの要求する実験を終了することができ、仕上げ等は共著者の先生方をお願いして、産後休暇に入ることが出来ました。

また復帰後も、年度途中から新たに支援員配備をしていただくことが出来たため、研究室内での限られた時間を最大限、実験時間に当てることができるようになり、次の論文受理に向け集中して取り組んでいるところです。また、共同研究にも大幅な支障を来すことがないため、研究者としての責任を果たす上でも、大変助かっております。

② プライベートの面

2014年2月半ばに出産しましたが、出産の正確な日時は不明、出産直後はメールの返信すらままならないことが予想され、出産日によっては4月の保育園入所ができなくなるために復帰時期が決められない、というような状況で不安がいっぱいでした。ですが、支援員の方に来ていただくことができたため、出産前の研究時間をすべて実験に当てることが出来、本当にありがたく思いました。おかげ様で論文の目処がつき、共著者の先生方に多大な迷惑はかけずに済んだかな、と一安心するとともに、出産したあとは育児に専念することが出来ました。

2 研究支援員が配備されたことで、業績の向上（論文投稿、学会発表、受賞、表彰、研究費獲得等）に関与したものはありますか？ あれば具体的にお知らせください。

上記のような状況で実験を終えることができ無事に受理されたのが、Nature Commun. 5:4004, 2014です。これに関しましては、「赤血球からミトコンドリアが除かれるメカニズムを解明」—新しいタイプのオートファジーが

関与一、としてプレスリリースも出ておりますので、ご覧いただけましたら幸いです。

(<http://www.tmd.ac.jp/archive-tmdu/kouhou/20140604.pdf>)

3 当事業について、改善点やご意見など、コメントをいただけますか？

出産・育児のために実験や論文作成が遅れてしまうのは、研究室のメンバーや共同研究者にとっても、やきもきする状況かと思えます。特に、論文投稿、reviseの実験などは、出産、子育て、というような都合で遅らせるわけにはいきませんので、一研究員にとって、支援員の方に研究を全面的にバックアップしていただける状況は、ほんとうにありがたいです。もし、一番大変な産後の復帰直後から支援していただくことができれば、研究室のメンバーへの負担や、共同研究への研究遅滞を軽減することができるため、復帰時の心理的・物理的な負担が減り、大変ありがたいのではないかと思います。

4 ご自身の今後のキャリアの目標をお聞かせ下さい（プライベートも含めて）。

研究者としてサバイバル。研究を楽しみつつ、後悔ない子育て。

5 次世代の女性研究者へのメッセージをお願いします。

研究者は「任期制」という不安定な状態の中で、いつ結婚・出産するか、というタイミングを見つけるのは、非常に難しいかと思えます。しかも、タイミングなんて考えるとストレスになることばかりです。ポジティブシンキングで、今できることを最大限にやりつつ、そのとき、ベスト！と思ったことを選択していくのが一番かなと思えます。





1 研究支援員配備事業を利用して、どのようなことが変わりましたか？ 配備前と配備後とで、具体的な改善面などをお知らせ下さい。

① 研究・仕事の面

26年度の研究支援員配備事業に採択して頂きましたが、研究支援員の募集後、決定するまでに少し時間がかかりました。新たに研究内容を把握し、実験手技を理解して頂くのでは負担になるため、募集を分野に近い方に絞ったうえで、実際に実験の経験と技量のある外国人を採用することになりました。就労ビザ修了に数か月かかりましたが、男女協働・キャリア支援部のご理解とご協力を頂き、希望の方に支援いただくことになりました。私自身、週3日の非常勤勤務で、データ分析、論文執筆、研究費の申請、報告など、研究室にいてもデスクワークが多く、実際実験室に赴く時間は限られておりました。指導中の大学院生の指導、学位審査の準備、また他大学、企業との共同研究があり、出張する機会も多くありました。その状況で、実験を自ら完璧に実施することは不可能でしたが、研究支援員のサポートで何とか中断、遅延することなく、実験結果が出せたと思います。また採用した外国人の支援員の方も、学位(博士)は日本で取得したものの、未就学児育児中のため、フルタイム就職ができないとのことで、研究支援員の週20時間程度が負担のない就労条件で、しかも次のキャリアアップに繋がれるとのことで、大変喜んでもらえました。

② プライベートの面

小学生2人の養育中ですが、これまで全くPTA、学級活動には参加できませんでした。研究支援員配備事業を利用していただき、参加する機会が持て、保護者の皆さまとも交流することができました。仕事している、していないにかかわらず、保護者として学校、学級活動への参加、支援は必ず求められます。今年度は何とか責任を持って活動することができ、ありがたく思っております。

2 研究支援員が配備されたことで、業績の向上(論文投稿、学会発表、受賞、表彰、研究費獲得等)に関与したものはありますか？ あれば具体的にお知らせください。

①The first author, corresponding author として、Dental Materials, Journal of Dentistry 等に投稿、2015年度はすでに2件発表されております。

②指導中の大学院4年生の発表(Nassar M, Hiraishi N, Tamura Y, Otsuki M, Ohya K, Tagami J. Phytic Acid: An Alternative Root Canal Chelating Agent.)が 92nd 国際接着学会IADR general session, Cape Town, South Africa, June 25-28, 2014.にIADR Hatton Awards候補者として採択されました。

③3月の93rd 国際接着学会 (IADR general session, Boston, USA)に参加予定です。

④他大学、企業との共同研究に携わっております。出張、講演依頼などもお断りすることなく行えました。

3 当事業について、改善点やご意見など、コメントをいただけますか？

今回、外国人の研究支援員の採用につき、ご尽力いただき、大変ありがたく思っております。

研究支援員の応募概要を掲示させていただきましたが、週20時間という勤務形態で、また実際に研究する際に、その環境にすぐ順応して頂けるかを考慮すると、支援員が見つかるかどうかという不安はありましたが、幸運に、採用決定がスムーズに行えました。

4 ご自身の今後のキャリアの目標をお聞かせ下さい(プライベートも含めて)。

時間も制限されがちですが、工夫して研究、臨床のキャリア向上を目指していきたく思っております。少子高齢化の今後の日本を根本的に支えるのは出産と育児かもしれません。よって育児も大切なキャリアの一つと感じております。

5 次世代の女性研究者へのメッセージをお願いします。

研究職は、データを実験室で出しておけば、分析解析はデスクワークで研究室以外でも行えます。私もかつて出産前にデータをすべて出しておいて、新生児の育児中に解析、論文作製を行いました。論文発表に向け、文献検索もネットで行えますし、Discussionもメールで可能です。育児でメンタル面にブルーになる方がおられるようですが、論文発表準備などは気分転換になり、育児にも良い影響がでるのではないのでしょうか？ また、自分一人で頑張っている意気込みではなく、家族や職場の方の理解と支援に常に感謝する気持ちも大切だと思います。



1 研究支援員配備事業を利用して、どのようなことが変わりましたか？ 配備前と配備後とで、具体的な改善面などをお知らせ下さい。

①研究・仕事の面

今年度から学振の特別研究員(RPD)として職場復帰するにあたり、0歳児と幼稚園児の2人の育児を理由に、研究支援員配備事業に応募いたしました。

支援員の方においで頂いた当時は、「マウス胎児の冠動脈走行における性差の解析」という、当該研究領域においても新規の研究テーマを軌道に乗せるために苦慮しているところでした。支援員の方は、コケ類の分類学的研究がライフワークで、顕微鏡や画像処理ソフトの扱いに長けておられましたので、検体の顕微鏡写真の撮影から測定までをお願いし、私は解析と、分業体制を採りました。撮影～測定は時間のかかる作業ですが、支援員の方はこつこつと根気よく、かつ効率的に作業を進めて下さり、大変頼もしく感じております。分業体制で研究を遂行できることは、研究の効率化に加え、この研究テーマにおいては、ブラインドテストを可能にしたという点で研究の信頼性という副産物も与えてくれています。研究に費やせる時間が少ない環境では、新規の研究テーマの立ち上げは躊躇しがちですが、果敢に挑戦できたことも支援員の方あってのことと感謝しております。

支援員の方には、ラボの清掃や共用試薬の管理など、私がラボで果たすべきデューティについてもお手伝い頂いております。雑用と見過ごされがちこれらの作業も、私が不安定な勤務を理由に疎かにすれば、ラボの他のメンバーの負担増や研究遂行の妨げにつながりかねません。支援員の方によるサポートは、私のみならず研究室の効率的な運営上も有効だと思えます。

②プライベートの面

復帰当初は、自分がどのくらい仕事ができるかという心配はもとより、研究室に迷惑をかけないかという不安も抱えておりました。研究支援員という制度を通じて、これらの精神的負担を軽減して頂けたことは大変感謝しております。安定した気持で日々を送ることは、家族と向き合う際のゆとりにつながっていると思えます。

2 研究支援員が配備されたことで、業績の向上(論文投稿、学会発表、受賞、表彰、研究費獲得等)に関与したものはありますか？ あれば具体的にお知らせください。

現在、投稿中の論文が1報、執筆中のものが1報という状況です。また、分子生物学会、生理研研究会において、それぞれポスター演題を発表いたしました。

3 当事業について、改善点やご意見など、コメントをいただけますか？

特別研究員(RPD)として今年度4月からの採用が認められたため、0歳児を保育園に預ける必要がありましたが、住まいのある自治体の認可保育園への入園審査は、入園申請時時点(前年度12月)の就労状況に重点が置かれていたため、選考から漏れてしまいました。途方に暮れていたところ、学内保育園への入園が認められ、折角頂いたチャンスを不意にすることなく、職場復帰を果たせました。アカデミックを志す研究者は、社会においては少数派で、時に行政の制度に適合できず、思わぬエアポケットに陥ってしまうことがあるようです。大学が学内保育園や研究支援員配備事業など女性研究者支援を推進して下さることは、研究者の社会的に不利な側面を補完するという点においても非常に意義深いと感じております。

4 ご自身の今後のキャリアの目標をお聞かせ下さい(プライベートも含めて)。

職場復帰にあたっては、研究支援員配備事業、学内保育園と本学の女性研究者支援制度を存分に利用させて頂きました。また日頃より、温かく見守って下さる生体情報薬理分野の皆様なくして、日々の研究は成り立ちません。心より感謝申し上げます。第一に皆様から頂いたご支援・ご協力を目に見える成果として結実させること、それを基に研究者としての自分自身の足場を固めること、が目下の目標です。女性研究者のサポート体制の恩恵を次の世代に継承していくためにも、自身の研究においては最善を尽くしたいと思います。

5 次世代の女性研究者へのメッセージをお願いします。

育児をしていれば、思い通りにならないこともままありますが、子どもは日々成長するものだと実感しています。子育てを通じて得られる喜びと研究を通じて得られる喜びは、それぞれ全く別のもので、優劣もありません。私自身も次世代の研究者として、研究に対する純粋な思いを大切に、自分なりのワーク・ライフ・バランスを見出していければと思います。

シンポジウム「地域とつながって研究者の研究力を育てよう ～活かしてみよう、あなたのこれまでのキャリア～」を開催しました。

研究者の育児・介護とキャリア形成を支え、地域内の医学系大学、自治体、企業が相互に連携していく可能性を検討することを目的に、平成26年12月23日(火)に本学M&Dタワー2階の鈴木章夫記念講堂にてシンポジウムを開催しました。本シンポジウムは、「平成26年度 国・地方連携会議ネットワークを活用した男女共同参画推進事業」として、内閣府、男女共同参画推進連携会議との共催により実施しました。

シンポジウムは、宮崎 泰成機構長(学生支援・保健管理機構)の開会挨拶で始まり、その後第1部のプログラムでは、成澤 廣修氏(文京区長)より、「子育てしやすい地域づくりとは～次世代育成に向けて～」について基調講演が行われました。成澤区長は、首長として全国で初めて育児休業を取得された経験について触れ、その後文京区の男性職員の育児休業取得者数が増加していることなど、地域行政において男女協働参画の推進をリードしている状況を紹介しました。

続いて、「ワークスタイル変革に必要な3つの要素」について、青野 慶久氏(サイボウズ株式会社 代表取締役社長)の講演が行われました。青野氏は、自身の育児経験から得た父性への気づき、育児の大切さと大変さについて述べるとともに、

各社員のライフイベントに応じた多様な勤務制度を紹介しました。更に、ワーキング・マザーへの理解や、育児参画の意識を高める目的でサイボウズ(株)が作成した動画「働くママたちに、よりそうことを。」を放映し、参加者の皆様の感動を呼んでいました。

その後「地域と医学系大学で連携したファミリーサポート事業」について野原 理子氏(東京女子医科大学 医学部衛生学公衆衛生学(一)教室 講師)より講演が行われました。野原氏は、東京女子医科大学が新宿区および東京医科大学と連携して実施しているファミリーサポート事業の詳細を紹介しました。「ファミリーサポート事業とは、大学職員の育児と仕事を両立するため、地域の人々から育児支援を受ける相互の援助活動」と説明し、地域の方々との連携方法や研修システムに加え、活動実績が伸びている状況や、事業の利点について触れました。各人のニーズに合わせた保育支援ができることや職員の離職防止に役立つこと、そして地域とのつながりが増えるといった利点は、今後地域社会で保育支援事業を検討する上での参考となりました。

第2部の事例報告では、平澤 恵理氏(順天堂大学 老人性疾



本学 宮崎 泰成氏



文京区長 成澤 廣修氏



サイボウズ株式会社 青野 慶久氏



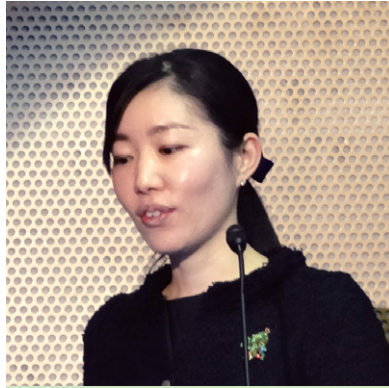
東京女子医科大学 野原 理子氏



本学 大石 由美子氏



本学 田中 陽子氏



順天堂大学 河野 春奈氏



順天堂大学 平澤 恵理氏



本学 井関 祥子氏



本学 平井 伸英氏



本学 有馬 牧子氏

患病態・治療研究センター 先任准教授)を座長に迎え、「研究とライフイベントとの両立」をテーマに、育児と研究とを両立している女性研究者の方々から報告が行われました。最初に大石 由美子氏(難治疾患研究所 先端分子医学研究部門 細胞分子医学分野 テニュアトラック准教授)から「生活習慣病のメカニズムの解明と新しい治療法の開発を目指して」について、次に田中 陽子氏(大学院医歯学総合研究科 システム発生・再生医学分野 特任助教)から「子育てしながら研究、研究しながら子育て」について、そして河野 春奈氏(順天堂大学大学院 医学研究科泌尿器外科学講座 助手)から「遺伝性腎疾患の臨床と研究—母親の目線を生かして」について発表が行われました。各報告者より、日々どのように育児と研究の時間をやり繰りしているかの具体的な方法が紹介されるとともに、現在取り組んでいる研究についても報告がなされ、女性研究者の持つ研究力をアピールすることができました。

その後に行われたワークショップ「育児と介護、実際にやってみて分かったこと」では、有馬 牧子氏(学生支援・保健管理機構 学生・女性支援センター 助教)を座長に迎え、田中 智彦氏(教養部 准教授)、成瀬 妙子氏(難治疾患研究所 分子病態分野 プロジェクト助教)が登壇しました。田中氏は、男性教員として育児休業を1年10カ月間取得したきっかけや、復職後の周囲への意識の変化等について紹介しました。成瀬氏は、介

護と研究とを両立するためのモチベーションの保ち方や、地域社会と介護との連携方法について具体的な提案を行いました。また、当日参加者の方々に配布していた「家事メン度・育メン度チェックリスト」にその場で記入を行い、参加者の方から、自身の「家事メン度」点数の発表がなされました。

最後のプログラムとして行われたパネルディスカッション「地域とつながって女性研究者の研究力を育てよう」では、井関 祥子氏(女性支援専門委員会 委員長)をコーディネーターに迎え、パネリストには前田 美穂氏(日本医科大学 小児科 教授)、塩満 典子氏(宇宙航空研究開発機構 男女共同参画推進室長)、平澤 恵理氏(順天堂大学 老人性疾患病態・治療研究センター 先任准教授)、そして青野 慶久氏(サイボウズ株式会社 代表取締役社長)、野原 理子氏(東京女子医科大学 医学部衛生学公衆衛生学(一)教室 講師)を迎えました。パネルディスカッションでは、ライフイベントと仕事を両立していく上での地域連携の方策について、各パネリストや参加者の方々と意見交換を行いました。参加者からは、地方における育児支援策や、ファミリーサポート事業を介護においても活用する提案、更にIT技術を使い、予防介護に役立てるための方策などが提案されました。

最後に、平井 伸英氏(学生支援・保健管理機構 学生・女性支援センター長)の閉会挨拶でシンポジウムを締めくくりまし



た。参加者からのアンケートでは、「行政・大学・企業の色々な立場からの意見を聴くことができ有意義だった」「ワーキングマザー、ワーキングファーザーの方々から、仕事と育児をいかに両立させたかという生の声を聞くことが出来て良かった」「介護の話はとても参考になり、地域との連携の重要性を益々実感した」等の声が寄せられました。今回のシンポジウム開催により、地域と医学系大学が連携して、育児・介護と研究

との両立支援事業を行うことだけでなく、ライブイベントに応じた柔軟な働き方への提案や、意識の持ち方について検討することができました。当支援部でも、シンポジウムで挙げられた課題を今後の事業改善の参考にしていくとともに、文京区や区内外の医学系大学と連携した保育支援事業の実施も検討して参りたいと考えております。



本学 田中 智彦氏

本学 成瀬 妙子氏



パネルディスカッションの様子



NHK総合ニュース7でシンポジウムの内容が放映されました。

平成26年12月23日(火)に開催したシンポジウム「地域とつながって研究者の研究力を育てよう」の内容は、同日のNHK総合ニュース7「“女性研究者を増やせ”ネットワーク発足」として放映されました。番組の中では、日本の女性研究者の割合は14.6%と世界で最低水準であり、その理由には、家庭と研究の両立が困難であることが挙げられており、「7割以上の女性研究者が家庭と仕事との両立に困難を感じている」というデータが報告されました。また、シンポジウムの登壇者である大石 由美子氏(難治疾患研究所 先端分子医学研究部門 細胞分子医学分野 テニュアトラック准教授)の育児と研究との両立に関するインタビューも併せて放映されました。

さらに、NHK国際放送でも同内容のニュースが1月7日に放映されました。日本の女性研究者の家庭と仕事との両立の状況のみならず、本学の研究支援員配備事業の内容、そして地域の医学系大学がネットワークを作り、家庭と仕事との両立に関する課題に取り組む様子を国内外に発信することができました。

The screenshot shows the NHK WORLD News website interface. At the top, there are navigation tabs for Home, News, TV Programs, Radio & Podcast, and Japanese Lessons. Below the navigation is a search bar and a main news headline: "Police in France continue to hunt for the 2 suspects wanted". A video player is prominently displayed, showing a woman in a lab coat working in a laboratory. The video title is "Women Scientists Seek Balance". Below the video player, there is a "Program Information" section for "NEWSLINE is 'Your eye on Asia'", which includes a description: "Every hour, this program provides news from around the world, including coverage of the latest in politics, business, technology and culture in Asia." and a status indicator "On Air Now". The footer contains the NHK logo and copyright information: "Copyright NHK (Japan Broadcasting Corporation) All rights reserved."

「若手研究者キャリアデザイン事業」を実施しました。

本事業は、事業の参加メンバーである女子大学院生が今後の自分のキャリア形成において必要なプロジェクトを自主的に企画運営することを目標としています。

今年度の事業は実施5回目となり、海外に焦点を当てた内容の活動となりました。メンバー8名のうち4名が日本人学生、4名が留学生で、2名がベトナム出身、2名が新疆ウイグル自治区の出身でした。

企画内容としては、海外の働く女性の両立支援制度について、日本とアジア諸国、欧米諸国との違いを比較する「働く女性のための両立支援制度—アジア諸国と欧州諸国の比較—」グループ、モチベーションや健康、美についてのセミナーを開催し、それらについての学内の意識調査を行う「セミナー開催」グループに分かれて7月から11月まで活動を行いました。これらの活動を報告書として「Live a better life—より輝く自分へ—」にまとめ、11月に発行しました。

http://www.tmd.ac.jp/ang/report/H26_RA_Report_all.pdf

働く女性のための両立支援制度 —アジア諸国と欧州諸国の比較—

参加メンバー

川崎 真希理(リーダー)

(医歯学総合研究科 分子薬理学分野 博士課程3年)

前屋舗 千明(副リーダー)

(医歯学総合研究科 消化器病態学分野 博士課程2年)

岡田 恵美

(医歯学総合研究科 インプラント・口腔再生医学分野 博士課程2年)

ザイヌル アブレミテ

(医歯学総合研究科 食道・一般外科(血管外科)学分野 博士課程4年)

グリニサ アヒマディ

(医歯学総合研究科 包括病理学分野 博士課程1年)

グエン ビョー ノック チャン

(医歯学総合研究科 インプラント・口腔再生医学分野 博士課程2年)



セミナー開催

参加メンバー

グエン ホー クイー アン(リーダー)

(医歯学総合研究科 疼痛制御学分野 博士課程1年)

伏見 麻由

(医歯学総合研究科 有機生体材料学分野 修士課程1年)

グエン ビョー ノック チャン

(医歯学総合研究科 インプラント・口腔再生医学分野 博士課程2年)



Open Campus

オープンキャンパスに参加しました。

平成26年8月4日(月)、5日(火)に開催された本学のオープンキャンパスにおいて、若手研究者キャリアデザイン事業のメンバーが事業の紹介を行いました。各グループの企画内容をまとめたポスターを掲示して紹介を行うとともに、当支援部の展示ブースに立ち寄られた参加者の方々からの質問にも答えていました。「研究者になると、日々ど



のような生活を送るのですか?」「どのような研究テーマに取り組んでいるのですか?」など、若手研究者のロールモデルとして、積極的な交流を図りました。

また当日は、参加者の方々に将来の夢を書いて頂き、大型ポスターに印刷した「キャリアツリー」にその夢を掲示するイベントを行いました。毎年恒例となっているこのイベントでは、今年も多くの参加者の方々の夢が掲示され、「東京医科歯科大学に入学したい!」「人のために役立つ仕事をしたい」等が寄せられました。

Career Support



仕事・学業と育児との両立支援セミナーを開催しました。

平成26年5月28日(水)に「仕事・学業と育児との両立支援セミナー」を開催しました。育児休業から復職した方、現在育児中の方、今後育児と学業・仕事を両立したいと考えている方など、学内の男女の教職員・学生を対象に実施しました。

セミナーでは、①日々の生活をどのようにやり繰りする
のか、②家庭、育児、仕事、学業のそれぞれに、どのように

モチベーションを保つのかを中心に検討を行いました。

日々育児と学業・仕事を両立するには、一日24時間の各時間帯のうち、何にどれくらい使い、そして何に優先順位を置くのかを考えることが不可欠です。そこで自分の時間管理状況を把握するため、自分の一日のスケジュールをチェックするグループワークを行いました。配布した「一日のスケジュール表」の「家事」「育児」「仕事」欄に、何時から

何時まで何を行っているかを書き込み、グループのメンバーで共有しました。自分自身の客観的な時間の使い方を確認したことで、「夕方の時間の使い方をもう少し工夫すれば早く帰宅できる」「帰宅後は食事の準備や子どもの食事、後片付けなど用事が重なるため、子どものお風呂は夫に頼みたい」等、改善方法を考えることが出来ました。

参加者の方からは、「学内で育児をしている人々の意見を聞くことができ、自分も頑張ろうと勇気が出た」等の声が聞かれました。





キャリアセミナーを開催しました。

平成26年9月2日(火)と4日(木)に、学内の男女の教職員・学生を対象に2回連続でキャリアセミナーを開催しました。第一回セミナーで行った「自分の価値観を知る」ワークでは、「価値観の言葉リスト」の中から自分が選んだ言葉をグループ内で発表しました。またグループの他のメンバーが選んだ価値観の言葉も併せて聞き、選ばれた言葉の多様性に、各グループで大きな盛り上がりを見せていました。

第二回セミナーでは、「現在のキャリアと今後のキャリアを考えるワーク」と「自分のライフキャリアレインボーを描く」ワークを行いました。後者のワークでは、「人生は「様々な役割の組み合わせ」であり、キャリア形成は人生における各役割と相互に関係があり、また影響を及ぼし合う」という概念を紹介しました。そこから、人生の7つの役割(子ども、親、学生、職業人、家庭人、市民、余暇を楽しむ人)を虹に見立てた「キャリアレインボーの図」を配布し、実際にレインボー図の中に、参加者の方々の現在の役割別に色を塗るワークを行いました。参加者の方からは、「自分が思っていた以上に多くの役割を持っていることが分か

り、これからはどの役割に重点を置くかを考えるヒントをもらえた」との声が聞かれました。

Career Seminar

キャリアセミナー開催のお知らせ

これからのキャリアを築いていくために、自分の価値観を知り、自己理解を深めてみませんか？新しい気づきが見つかるはずです。ぜひご参加ください！

◇ セミナー概要 ◇

【第1回】平成26年9月2日(火) 12:00~13:00
「自分の価値観を知ろう」
「これまでのキャリアを振り返ろう」

【第2回】平成26年9月4日(木) 12:00~13:00
「現在と今後のキャリアを考えよう」
「自分のライフキャリアレインボーを描いてみよう」

～2回連続の内容ですが、どちらか一方のご参加でも可能です～

湯島地区 M&Dタワー11階 大学院講義室3

対象者：本学の男女の教職員、学部生・大学院生
(男女を問いません)

≪講師≫ 有馬牧子
(学生・女性支援センター 女性支援部 助教)
(国家認定キャリアコンサルタント)

※昼食をご持参の上、ご参加下さい。

東京医科大学 学生支援・保健管理機構 学生・女性支援センター 女性支援部
～ 学内のキャリア支援や、学業・研究・仕事と家庭との両立支援を行っています ～

≪問い合わせ・申込先≫
TEL: 03-5803-4923 FAX: 03-5803-0346 E-mail: info.ang@tmd.ac.jp
<http://www.tmd.ac.jp/ang/>



パパ・ママ情報交換会を開催しました。

平成27年3月9日(月)に、パパ・ママ情報交換会を開催しました。順天堂大学と合同開催で行い、現在育児中の方、妊娠中の方、これから育児をしてみたいと思う方など、教職員や学生を含む26名の方々が集まりました。育児と仕事とを

両立する上で知りたい情報や必要な制度について、参加者の方々と自由な意見交換を行ったところ、男性の参加者から「育児に関わっていきたいが、仕事が多忙なため実際に育児をする時間が少なく、どのようにして関わったらよいか



分からない」「夫(パパ)に家事・育児に関わってもらうためには、何か一つでも、パパの方がママより優れている領域を作ることが必要」などの意見が出ました。また保育園等のお迎えがあるため、学内の会議やセミナーなどは17時前に開催してほしいこと、そしてセミナー、シンポジウムの内容がe-learningでも閲覧できると、在宅でも参加できる等の具体的な提案がなされました。この情報交換会をきっかけに「育児ネットワーク」を作り、今後も交流の場を設けて行く予定です。



授乳・搾乳室を開設しています。

小さいお子さんをお持ちの方や、育児休業や産後休暇からの復帰が間もない方がキャリアを継続するためには、学内で授乳や搾乳をする専用のスペースが必要になります。

これまで、学内の教職員・学生向けの授乳・搾乳室の設備は整っていない状況でした。そこで平成24年度に、学内で授乳・搾乳室設置のニーズ調査を教職員・学生を対象に実施したところ「学内に授乳・搾乳の専用スペースが必要」との回答は、女性が88.5%、男性が80.1%と8割以上の結果でした。専用の設備がなかったため、「研究室近くのお手洗いで、30分以上かけて搾乳をした」という切実な声も寄せられていました。

これらの結果を受け、平成26年9月より、湯島キャンパス5号館3F、学生・女性支援センター内の一部屋を授乳・搾乳のスペースとして開設しました。現在のところ、大学院生や留学生、教職員の方など、一日に複数回の利用があります。室内には電



子レンジや冷蔵庫、湯沸かし器も整備されているため、搾乳に必要な備品を消毒したり、搾乳後に冷蔵庫で保存することが可能です。搾乳した母乳を冷蔵庫に保存し、帰宅前に取りに来られる方もあり、今後も様々な利用のニーズがあることが予想されます。現在の部屋は定常化した設備ではないため、今後は定期的な部屋を確保し、整備できるように学内に呼びかけ続けてまいります。



保育支援サービスを実施しています。

今年度も(株)マザーネットと連携し、お子さんが病気の際に、代わりにお子さんのケアを行う病児保育を実施しました。病児保育に加えて仕事理由の場合や親が病気の際の保育、産前・産後ケアなどを提供しています。右記に、利用された方々からの感想をご紹介します。

- 「二回目の利用です。前日の夜から発熱したため、夜8時ころに翌日の派遣を依頼したところ、15分以内にケアリスト(ベビーシッター)の方を見つけて連絡して下さいました。前回に続き大変良い方で、息子もととても安心しているようでした。
- 毎回素晴らしいケアリストの方が派遣され、安心して依頼ができます。また昼寝中などの空いた時間に簡単な家事もして下さい、頭の下がる思いです。
- ケアリストさんから、「この時期の子どもにおススメのおもちゃ」「食べこぼしてもきれいに掃除する方法」など教えて頂き、参考にさせて頂いています。

「女性支援部」から「男女協働・キャリア支援部」に名称が変わりました。

平成26年11月より、学生・女性支援センターの構成組織の名称が変わり、「女性支援部」は「男女協働・キャリア支援部」となりました。これまでと同じく、学内の方々のワーク・ライフ・バランス支援、キャリア支援を行って参りますので、5号館3Fのオフィスまでお気軽にお立ち寄り下さい。

また、ホームページもリニューアルしました。活動内容やイベント情報を更に分かりやすくご案内しておりますので、ぜひご利用下さい。 URL: <http://www.tmd.ac.jp/ang/>



編集
発行

東京医科歯科大学

学生支援・保健管理機構 学生・女性支援センター 男女協働・キャリア支援部
〒113-8510 東京都文京区湯島1-5-45 5号館3階

Email: info.ang@tmd.ac.jp

電話: 03-5803-4921 FAX: 03-5803-0246

URL: <http://www.tmd.ac.jp/ang/>